

Yokohama Triennale 2014 Pre-event

A Case Study on Educational Programs of Asia Pacific Triennial of Contemporary Art in Australia

Kids' APT:

Connecting Contemporary Art and Kids

Document

ヨコハマトリエンナーレ2014 プレイイベント
オーストラリア発、国際展における次世代教育普及プログラムの事例紹介
「現代アートと子どもをつなぐキッズAPT」
記録集



- 02 開催概要／タイムテーブル
- 05 第1部：プレゼンテーション
「キッズAPT：アジア・パシフィック・トリエンナーレにおける子どものためのプログラムの事例紹介」
- 11 第2部：横浜の取り組み紹介
「横浜トリエンナーレと横浜美術館による教育プログラムへの取り組み」
- 18 第3部：意見交換
- 16 来場者アンケート
- 18 Pre-event Outline / Timetable
- 20 Part 1 Presentation “Kids' APT: A Case Study on Educational Programs of Asia Pacific Triennial of Contemporary Art in Australia”
- 25 Part 2 Introducing Education Programs in Yokohama “Yokohama Triennale and Yokohama Museum of Art”
- 26 Part 3 Discussion
- 30 Audience Feedback

ヨコハマトリエンナーレ2014プレイベント

オーストラリア発、国際展における次世代教育普及プログラムの事例紹介

「現代アートと子どもをつなぐキッズAPT」開催にあたって

アジア・パシフィック・トリエンナーレ (APT) は、オーストラリアのクイーンズランド州立美術館／ギャラリー・オブ・モダン・アート (QAGOMA) を拠点に、アジア・オセアニア地域の現代アートを紹介する国際展として1993年に第1回を開催して以降、この地域の美術を展示・収蔵するとともに、来場者向けのプログラム、なかでも子どもを対象とした「キッズAPT」に1999年より力を入れています。

横浜トリエンナーレでは、QAGOMAよりサイモン・ライト氏を迎え、第5回展 (2014年) のプレイベントとして2013年3月8日 (金) に「現代アートと子どもをつなぐキッズAPT」を開催。国際展における次世代教育普及プログラムの事例として、APT、横浜美術館、横浜トリエンナーレでの教育プログラムの取り組みについてご紹介しました。また、来場された学校関係者、教育普及担当者からも教育現場における日常的な課題や疑問が投げかけられ、APTでの具体例や課題についても共有されました。本書はその記録をまとめたものです。

[開催概要]

日時：2013年3月8日 (金) 19:00-21:00

会場：横浜美術館 子どものアトリエ

主催：横浜トリエンナーレ組織委員会、横浜美術館

[タイムテーブル]

19:00 主催者あいさつ

逢坂恵理子 (横浜美術館館長、横浜トリエンナーレ組織委員会委員長)

19:05 第1部 プレゼンテーション「アジア・パシフィック・トリエンナーレにおける子どものためのプログラムの事例紹介」

サイモン・ライト (クイーンズランド州立美術館／ギャラリー・オブ・モダン・アート プログラム担当アシスタントディレクター)

19:40 第2部 横浜の取り組み紹介「横浜トリエンナーレと横浜美術館による教育プログラムへの取り組み」

関 淳一 (横浜美術館 教育普及グループ長)

20:00 第3部 意見交換

司会：帆足亜紀 (横浜トリエンナーレ組織委員会事務局長)

20:45 閉会

注1) 事業名の総称および組織名は「横浜トリエンナーレ」(横浜=漢字表記)、第5回展の事業名は「ヨコハマトリエンナーレ2014」(ヨコハマ=カタカナ表記)となります。

注2) 本書の所属、肩書きは全て2013年3月8日現在のものです。





サイモン・ライト
クイーンズランド州立美術館／ギャラリー・オブ・モダン・アート プログラム担当アシスタント・ディレクター



逢坂恵理子
横浜美術館館長、横浜トリエンナーレ組織委員会委員長



関 淳一
横浜美術館 教育普及グループ長



司会：帆足亜紀
横浜トリエンナーレ組織委員会事務局長

第1部:プレゼンテーション

「キッズAPT:アジア・パシフィック・トリエンナーレ における子どものためのプログラムの事例紹介」

逢坂恵理子(以下、逢坂) | 皆様、こんばんは。金曜日の夜、こんなにたくさんお集まりいただきましてありがとうございます。

今日は、オーストラリアのブリスベンにありますクイーンズランド州立美術館／ギャラリー・オブ・モダン・アート(以下、「QAGOMA」という。)から、サイモン・ライトさんをお迎えしました。アジア・パシフィック・トリエンナーレ(以下、「APT」という。)は、QAGOMAで開催されている3年に一度の国際展ですが、そのなかで、キッズAPTという子どものための特別なプログラムを1999年から展開しています。通常国際展の話といたしますと、現代美術のアーティストの話や今どういう傾向が注目を浴びているかという話になるのですけれども、今回は子どもに現代美術をどのように伝えていくかということも含めまして、非常に貴重なお話が聞けるのではないかと思います。

私自身1999年のブリスベンで開催されましたAPTに参加しまして、子どもたちがギャラリーの一角で非常に楽しそうに色々なことをしているのを見て、国際展でこういう可能性もあるのだなと思ったのですが、当時は日本はまだまだそこまで到達しないとっていました。

美術館で子どものためのプログラムを行うには、色々なメリットや課題もあると思いますので、現場で多様な経験を積んでいらしたライトさんから、そうしたことをお聞きすることができる、またとない貴重な機会だと思います。今日は、2時間ほどになりますけれども、最後までお付き合いいただければと思います。よろしくお願いいたします。

帆足亜紀(以下、帆足) | それでは早速ですが、サイモン・ライトさんのプレゼンテーションに移りたいと思います。

ライトさんは現在QAGOMAのプログラム担当、アシスタント・ディレクターをされています。昨年着任されるまでにこちらの美術館のほかに、グリフィス大学のアートギャラリーのディレクターやプライベートコレクションなどさまざまな実績を積み重ねています。実は教育普及担当だけではなくプロジェクトのマネジメントや協賛・協力の獲得、コラボレーションする相手を探したりというようなネットワーキングのご経験もあるということですので、その辺りの話も後で触れていきたいと思っています。

ライトさんには、QAGOMAが主催するAPTという国際展における「キッズAPT」という子どものプログラムについてのご紹介をいただきます。

ではライトさん、よろしくお願いいたします。

サイモン・ライト | ご紹介ありがとうございます。

今は美術館の中でさまざまな年代層の来館者が自分たちなりの方法で美術の体験をしているのがごく当然のことになっています。物を作っている人もいるかもしれませんし、何かのパフォーマンスを見ていたり、トークに耳を傾けていたり、作品について考えていたり、あるいはオンライン上でインタビューやインタラクティブな作品キャプションなどを見ていたりすることもあります。また場合によってはSNSに自分たちの来場の様子の画像をアップロードしている人たちもいます。こういったことにより美術館の体験というのは、従来からの作家の声のみが一方向的に語りかけてくるという状況ではなく、極めて能動的な、今までになかったような鑑賞、体験を実現可能としています。

QAGOMAでは、子どもたち対象のプログラムのなかでも、コレクションを更に充実させていく上でも、また展覧会を実現させていくなかにおいても、現代美術が極めて重要な、圧倒的に注力すべき分野となってきました。そして、今までの最高記録の来館者数の記録をたたき出してきているのも現代美術関係の展覧会です。展覧会が人を惹きつけるのです。

今ご覧いただいているのが、ギャラリー・オブ・モダンアート(以下、「GOMA」という。)の入口になります[FIG. 1]。クイーンズランド州立美術館はここから100メートルほど離れた所にあります。

例えばAPTのように数年に1回、定期的に行われている重要な展覧会は多様な観客に対応する方策を示してきました。APTをはじめとする展覧会のなかで紹介した現代美術の作品は、間違いなく来館者の期待に挑み、また今までになかった体験を提供してきました。私たちは、観客が作品と直に触れ合い、また、参加することができるようにしたいと考えています。

現代美術の新たなオーディエンスとしての子どもたち

私たちは、現代美術にとって子どもというのが極めて重要な観客層になっていると認識しており、彼らを対象とするプログラムに取り組んでいます。

その結果、美術館の核となる事業と、アートと子どもを巡る領域について、さまざまな議論が沸き起こっています。それを見ていくことによって、私たちがアートについてどういうことを前提としているのか、また誰がそれに価値を見出しているのか、そして誰のためにこういったアートは作られているのかといった、さまざまなことが浮き彫りになります。

クイーンズランド州立美術館が、子どもや家族連れを特に重要視していこうと決めたのは1990年代後半のことでした。その当時、オーストラリア国内においても、また海外においてもその手本となる事例が非常に少ない時代でした。1988年以降、200万人以上の子どもが私たちの美術館を訪れています。

1990年代の後半において、美術館や博物館における教育というのは重要ではあるけれども、収集をしていくこと、そして展覧会を実現させていくキュレーションが先にあり、その後位置付けられていました。しかし若い観客のためのプログラムを開始して15年目を迎え、私たちの美術館は国際的にこの領域においてのリーダー的な存在と認められるようになってきました。

クイーンズランド州立美術館における子どもを対象とするプログラムを開発するためには、まず美術館自体の文化を変えていく必要がありました。そのため何代にもわたり館長、マネージャー、教育普及担当者、キュレーター、そしてデザイナーたちが多大な努力と挑戦を重ねてきました。美術館の組織文化そのものが発展し、進化した結果、子どもや家族連れといった観客層は、他の層と切り分けて別の物とみなされるのではなく、今や戦略的な計画の一部となりました[FIG. 2]。



FIG. 1 Visitors to 21st Century: Art in the First Decade, GOMA, 2010-11



FIG. 2 Visitors to The 7th Asia Pacific Triennial of Contemporary Art, QAGOMA, 2012-13

チルドレンズ・アート・センターとその理念

GOMAが2006年に開館して以来、チルドレンズ・アート・センターは、二つの展示空間を占めていますが、その存在は美術館全体にも影響しています^[FIG. 3]。プロジェクトを通じて意識的に子どものための作品と大人のための作品の境界線を曖昧にすることで、全体を一体化させています。

アーティストや観客と協働していく中で、チルドレンズ・アート・センターはいくつかの基本的な理念を見出すようになりました。大きく分けて次の通り三つあります。

1. 積極的な参加によって、幅広い現代の思想や文化に直接触れ、知的好奇心を刺激することができる
2. 現代アーティストの考え方というのは非常に純粋で訴求力があるため、子どもたちが世界各地の生活におけるアートと、その重要な役割について学ぶ一つの方法となる
3. 21世紀においてアート分野は今ままでなく拡大し、多様化している。これを通じて子どもたちは、この領域についてより広い理解と、未来における自分たちの役割への理解を深める

時代とともにデザインのエノベーションと職員の専門知識が大きく進化してきたなかで、チルドレンズ・アート・センターのプログラムとして変わらない要素がいくつか挙げられます。1点目は、アート作品と直接関係をつくることのできるような状況を実現させ支えていくということです。ここでは、作る、取り組む、そして解釈をすることによって重点を置いています。2点目に、学ぶことを通じて楽しむ、ということを通じていきたいと思います。視覚面でのリテラシーと理解力、そして問題解決力がポイントです。3点目は、多様な現代の思想と文化をもとに、子どもたちが自分たちの経験を最大限活かすことを可能にしていくということ。私たちは常に方向性を示していくということ、教えていくということ、そして自由に連想し、発想を広げていくことのバランスを探り続けています。

非常に簡単で実務的な取り組みも行っています。例えばアーティストが作品を作る過程を紹介し、アーティストという存在の謎に迫り、さらにハンズオン展示を通して直接的な関係を築くこと

で、より個人的なつながりを作っていくことも、我々の目的になっています。

私たちのやり方は想定していた以上の成果を出しています。チルドレンズ・アート・センターが進化していく中で、私たちのオーディエンス・エンゲージメント(観客との関わり方)のモデルは、子どもたちのみならず、全ての来館者の期待値に変化をもたらしています。全展示室に子ども用の解説カードを置いていますが、大人の方から、子どもはもちろん自分自身の体験にも役立った、という感想を多くいただいています。

子どもたちが美術館の大使に

今現在、定期来館者の多くは子どもたちですが、私たちにとっては大使のような存在です。親が子どもを連れてくるのではなく、子どもが家族を連れてきてくれるのです。

全ての企画を地域の教職員の方々に事前に体験してもらい、きちんと機能するか確認しています。昨年は来館者数全体の約20%が子どもでした。国際的に見ると、例えばイギリスでの平均は9%程度ですから、これは通常の美術館での数値よりもはるかに高く、実に異例な状況です。

子どものためのプロジェクトを企画する過程で、私たちは地域コミュニティや学校で事前調査を行います。そこでスタッフは新しい考えや教材を試し、自分たちが創り上げつつあるプロジェクトに対して、子どもたちがどのように反応するのかを実際に観察し、それを把握することができます。

つまり、アーティストと協力すると同時に、子どもとコラボレーションしています。子どもたちの反応というのは、フィードバックの仕組みの中において極めて重要な要素なのです。

このためチルドレンズ・アート・センターのプロジェクトは、現代美術の展覧会や作品の委嘱と同じくらい厳密に精査しています。要するに、展覧会をやった時これでうまくいくかどうかの一種の保険ともいえます。子どもは正直なので、うまくいかない時ははっきりとそう伝えてくれます。好きなものはただ気に入るのではなく、本当に心から好きになってくれます。



FIG. 3 Children's Art Centre, Level 1, Gallery of Modern Art

キッズAPTでの取り組み

ここで、第3回目のAPTについて話したいと思います。子ども対象のキッズAPTを初めて公開したAPTです。

ぜひご注目いただきたいのは、実際に体験した観客数の数です。時代とともに子どもたちの人数がどんどん増えていきます[FIG. 4]。

1999年のキッズAPTというのは、私たちが子ども対象プログラムにおいて、いくつかの初の試みが実現した年です。まず、子どもが現代美術の国際展にとって重要な観客であるということを確認しました。次に美術館として、子ども対象のプログラムがつけ足しではなく、大規模な展覧会の中の重要な一部として作り込んでいかなければいけない、そういった必要性があるという認識が生まれたということ。そして、この時に初めて美術館として現代美術の作家に子どもたちを対象とした作品の制作を依頼しました。今では、こういった子どものために制作された作品の収集もしています。

1999年以降、今までに当美術館を訪れた子どもの実に4分の1近くに相当する動員をキッズAPTが担っています。そして、今日訪れている来場者の多くや、若い美術館スタッフの一部にも、学校の見学や家族と一緒に訪れたキッズAPTで初めてこの美術館を知ったという人たちがかなりいます。現在の来場者の多くはこのように子どもの時からずっと私たちの美術館と歩んできており、今や美術館は自分たちのものだと考え、この場所を自分たちの誇りとしてくれています。

APT3での目玉の一つとなった作品に、中国出身のアーティ

ストでニューヨークに拠点をおく、蔡國強^{さいこくきょう}(1957年中国生まれ)の作品があります。30メートルの竹で作った吊り橋の作品《Blue dragon & bridge crossing》を、ギャラリーの中のウォーターモールという空間に架けました。蔡國強とのコラボレーションで若い来場者が自分たちで橋を作るというワークショップを行い、何千人もの子どもたち、そして子ども以外の人たちがこれに挑戦し、マスキングテープと竹ひごを使って、かなり美しいものを作り出しました[FIGS. 5, 6]。「あの橋は子どもには危険だ」と言う人も中にはいますがご心配には及びません。ここから落ちたのは大人1人だけで、子どもは1人も落ちませんでした。

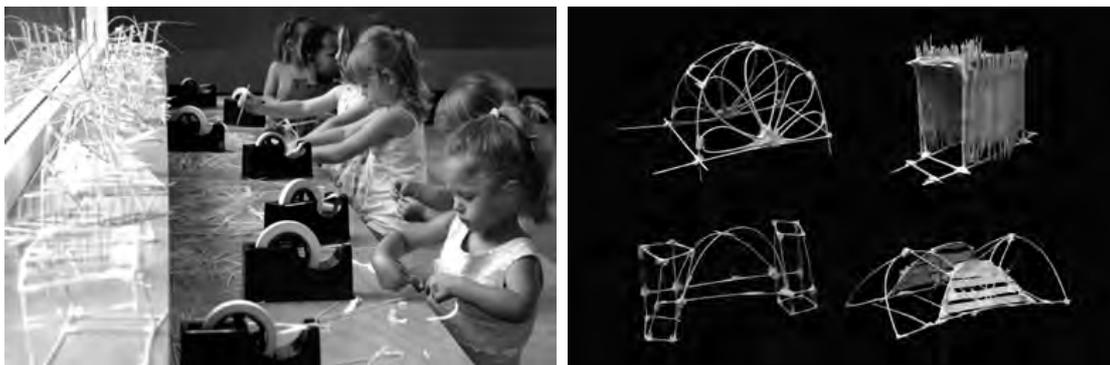
3年後のAPT4では、子どもも全体の来場者数も増えています。

これは皆さまご存知の草間彌生(1929年日本生まれ)の作品《The Obliteration Room》です。無から有を作りだし、有から無を作りだしていくプロジェクトでした[FIG. 7]。ここでは25万個のドットを使用しました。映像技術やピクセル化の話も色々展開させることもでき、去年テイト・モダンで行われた草間彌生の回顧展「Yayoi Kusama」(テイトモダンにて、2012年2月9日～6月5日)でも取り上げられました。子どもの中には自分の体を水玉まみれにして、この草間の身体への取り組みを素晴らしく発展させた子どももいました。

第5回のAPTの来場者数は大きく伸びました。ただし、GOMAも第2会場として同時オープンしたこともあるので、純増ではありません。この時は子ども対象のバーミヤン・ドロイーグ・プロジェクトを実施しました。アフガニスタンの子どもたちがどういう生活を送っているのかが分かるように、カディム・アリ(1978年パキスタン生まれ)とアフガニスタンの子どもたちと一緒に絵を

FIG. 4 APT3～7の観客数の推移

	会期	開催月数	観客数	子どもの観客数	会場数
APT3	1999年9月9日～2000年1月26日	5か月	150,000人以上	16,700人以上	1
APT4	2002年9月9日～2003年1月26日	5か月	220,000人以上	44,400人以上	1
APT5	2006年12月2日～2007年5月27日	6か月	750,000人以上	192,445人	2
APT6	2009年12月5日～2010年4月5日	5か月	530,000人以上	130,000人以上	2
APT7	2012年12月8日～2013年4月14日	4か月	350,000人以上	83,500人以上	2



FIGS. 5, 6 Cai Guo-Qiang, *Blue dragon bridge crossing* / Kids' APT3, 1999

描いてブリスベンの子どもたちに送りました [FIG. 8]。

見ての通りアイデアの段階からアーティストやキュレーターだけでなく、デザイナーや設計者を巻き込んで進めていきます。

キッズAPT6ではシラナ・シャバジ(1974年イラン生まれ)というアーティストのプロジェクトを行いました。子どもたちに地元のさまざまなフルーツや野菜を使って静物画の構図を作ってほしいと頼みました。これをアーティストに送り、アートセンター用に作品化してもらいました [FIG. 9]。静物画のワークショップも行いました。

これは家にある素材をリサイクルすることに重点を置いたイザベル&アルフレド・アキリザン(1965年/1962年フィリピン生まれ)のプロジェクトです [FIG. 10]。子どもたちには、使い道のなくなった日常的なものを持ってきてほしいと頼みました。

そしてAPT7は現在も進行中ですが、現在(2013年3月8日現在)まで

に35万人以上のお客様をお迎えしています。そのうち子どもの人数は約83,500人です。

これはアボリジニの現代アーティストであるダニエル・ボイド(1982年オーストラリア生まれ)です [FIG. 11]。オーストラリアのアボリジニ・アートはドットによって構成されているものと単純化されがちなのですが、ドットのなかには実にさまざまな意味が込められています。ダニエル・ボイドのインタラクティブな映像作品では、ドットの上を子どもたちが指でなぞると、その下から自分たちの姿が現れてきます。

これはベトナムのティファニー・チュン(1969年ベトナム生まれ)という作家です [FIG. 12]。ここでは子どもたちに動物をグループ分けさせて、そのグループで何が起きているかを語ってもらい、さらにそれを展示して絵に描き、新しい物語を考えてもらいました。多



FIG. 7 Yayoi Kusama, *The obliteration room* / Kids' APT4, 2002



FIG. 8 Khadim Ali, *The Bamiyan drawing project* / Kids' APT5, 2006



FIG. 9 Billboard painter Sirous Shabaghghi creating the mural in Iran / Kids' APT6, 2009



FIG. 10 Isabel & Alfredo Aquilizan, *In-flight (Project: Another Country)* / Kids' APT6, 2009



FIG. 11 Daniel Boyd, *History is made at night* / Kids' APT7, 2012



FIG. 12 Tiffany Chung, *One day the bird flies across the sea* / Kids' APT7, 2012

文化・異文化教育の側面を含みつつ、テキストとビジュアルとのマッチングをさせています。

これはパラストウ・フルハル(1962年イラン生まれ)によるマルチメディアのプロジェクトです[FIG. 13]。イランのペルシャ語の文字は、それぞれが一つの言葉を具体化しているという点を使って、子どもたちがスクリーン上でペルシャ語の文字を変形させて絵を描き、最終的にその字が意味する動物のシルエットが浮かび上がるようになっています。出来上がったものは自分や友達にメールで送ることができます。

最後は岩崎貴宏(1975年日本生まれ)です。ご存じかと思いますが、彼は髪の毛や綿糸、埃といった非常に儂いマテリアルを使って、都会の情景やランドマークなどの非常に精巧なミニチュアを作っています。そしてこれが見る者の視覚を試すようなものなのです。これを美術館の中の目立たない場所に置き、子どもたちが望遠鏡を通して見るように設置しました[FIG. 14]。ここでどうやって見るのかということと同じくらい大事なのが、何を見るのかということです。日常の中で目に留めていないような物がクリエイティブなプロセスを通して変化していくという点を見せています。

最後になりますが、美術館からアーティストにこれをしてほしいと依頼はしていないということがご理解いただけたかと思います。アーティストがこういうことをしたいと私たちに伝え、これを今度は子どもたちにぶつけてみます。これでうまくいくかどうか、子どもたちの反応を見た上で、さまざまな部署と協力して実現に向けて動きます。

全てのアーティストがこういう子ども対象のプロジェクトをやりたいわけではなく、それはそれで問題ありません。でも子どもたちと一緒にやりたいというアーティストもたくさんいます。そういうアーティストは本当にありがたいです。

ありがとうございました。

帆足 | ライトさん、どうもありがとうございました。駆け足ですがけれども、APTという3年に1回ブリスベンで行われている美術館を拠点とした国際展の教育プログラムの概要をご紹介いただきました。



FIG. 13 Parastou Forouhar, *Persian for kids* / Kids' APT7, 2012



FIG. 14 Takahiro Iwasaki, *Out of disorder (under construction)* / Kids' APT7, 2012

第2部：横浜の取り組み紹介 「横浜トリエンナーレと横浜美術館による 教育プログラムへの取り組み」

帆足 | 次に、横浜の取り組みを簡単にご紹介したいと思います。本日この会を設けましたのも、どのような教育プログラムのモデルが良いかという議論ではなく、どのような可能性を我々が探るべきかという意識のもと、子どものプログラムなのか、教育プログラムなのか、それを今後どのように構築していくかということを考えたいと思いました。

横浜トリエンナーレは、2001年に始まって2005年、2008年、2011年とこれまで4回開催しています。前回(2011年)は「Our Magic Hour」というタイトルのもと、先ほどご紹介いただきました岩崎貴宏さんなどの作品が展示されたのが記憶に新しいと思います。第1回は35万人、第2回は19万人、第3回は55万人、第4回は33万人という規模を誇る国際展となっております。

前回から、「見る・育つ・つなぐ」という指針を掲げるようになりました。特にこの「育つ」という部分をどのように子どもが考えていくのかというのが、本日『次世代』という言葉を使ってイベントを企画した理由でもあります。

前回は、「キッズ・アートガイド2011」という、子どもによるガイド・ツアーを初めて美術館の中でも試みました。これを検証しつつ、今後これを展開していくのか、ほかのプログラムを計画していくのかということを現在検討しているところです。特に検討したいのは、今後横浜美術館を拠点として行う場合には、横浜美術館は実はもう24年「子どものアトリエ」「市民のアトリエ」という活動をしているので、その資源を活用して、連携していく可能性も探らなければなりません。そこで、美術館をベースにしたAPTの事例というのは私たちに示唆深いものとして今回は色々ご相談、協議、また質問をしながら後半を進めて参りたいと思います。まず、教育普及を担当している関より、横浜美術館の事業をご紹介したいと思います。

関 淳一(以下、関) | 横浜美術館、教育普及を担当しております。よろしくお願いたします。

本日は、クイーンズランド州立美術館を拠点で開催されているAPTから、サイモン・ライトさんにお越しいただいております。子どもの横浜トリエンナーレも前回から横浜美術館を拠点で開催するようになりましたので、現在横浜美術館で行っている教育プログラムについて共有させていただき、今後子どものトリエンナーレで美術館のエデュケーションがどのように活かされていくかということと一緒に考えていただければと思っております。

横浜美術館は今年で開館24年目になりますが、つくるプロセス、作家との出会い、造形体験、創作体験に重点をおいた教育普及を、12才以上を対象にした「市民のアトリエ」、12才以下を対象とした「子どものアトリエ」でずっと行ってまいりました。

「子どものアトリエ」では、子どもの内面的な育成を、造形活動を通して支援していくことを主眼に置くと共に、将来の来館者をどんどん増やしていきたい、色々な方に美術館に親しんでいただきたい、ということを目的に活動を進めております。

また、「子どものアトリエ」では、学校向け、個人向けの色々なプログラムを行っておりますが、今年度から横浜美術館では鑑賞を担当するチームもでき、今までの造形体験に鑑賞もリンクさせたプログラムを色々充実させております。この写真は浮世絵を中心に展示をいたしました前回の企画展「はじまりは国芳」展の時に浮世絵の摺り師のデモンストレーションを子どもに見てもらった企画です^[FIG. 15]。また、子どもに浮世絵の摺りの体験してもらい、エドゥケーターと一緒に鑑賞するという講座も行いました。踏み台等を用意して子どもが見やすい環境を作って鑑賞しているところです。

夏休みには「子どもフェスタ」を開催しています。美術館を見てきてレポートしなさいという宿題を抱えて来館する子どもたちをサポートの意味も含めて、美術館のエドゥケーター、市民ボランティア、それから学校の美術教師のボランティアが、美術館の作品へ子どもたちを導いていくというかたちで開催しております。実際の画材のサンプルや作品カード等をきっかけにして、子どもたちとやり取りをしながら、実際の作品をよく見るということを行います。その作品について子どもたちが自分の意見を持ち、そして作品を考えていくことを促していく、というかたちで進めております。また、この期間中には学校の美術クラブや個人を対象にしたギャラリーツアーも行っております。横浜美術館ではこういうかたちで学校の先生に参加していただいたり、学校の美術部に来ていただいたり、学校における美術教育との連携ということも視野に入れて、今後美術館教育を発展させていきたいというふうに考えております。

短いです、これで横浜美術館のエデュケーション、特に子どもを対象としたエデュケーションについての報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。



FIG. 15 親子で鑑賞「浮世絵摺り師の技を見よう」
刷り師：林 勇介

第3部：意見交換

帆足 | 質問をたくさん寄せていただきありがとうございます。今日は教育普及関係や学校関係の方々も大勢来ていらっしゃると思います。内容の重複している質問につきましては、まとめてご質問させていただきます。

まず、QAGOMAの美術館のプログラムと学校教育との関係性、学校と先生との関係性、また学校単位の来館の場合、美術に関心のない生徒さんへの取り組み方、その辺りはどのように対応されていますでしょうか。

サイモン・ライト | 学校との取り組みについてはいくつかのやり方で実現させていますが、ブリスベンにはQueensland Art Teachers Association (クイーンズランド州の美術教師のための協会)があり、そちらとの関係も緊密なものにしています。

チルドレンズ・アート・センターは私たちの教育部門と組織としては別のものであるということを付け加えておきます。プロジェクトの実施が決まった瞬間から実行委員会形式で発足させ、委員会自体はチルドレンズ・アート・センターの傘下になります。教育普及担当と、マーケティング担当、デザイナー、キュレーター、そしてアーティストといった関係者全員がここに集まり、同じ目標に向かって協働していきます。

教育部門から2名の職員は常勤で、2人とも初等教育と中等教育における教員経験があります。チルドレンズ・アート・センターの2名の職員もやはり教育関係の経験があります。そういったところからお互いに刺激し合っていくことができます。

私たちは、それぞれのプロジェクトが美術館のスペースを使って自然に展開していけるように努力しています。ここにあるのは次回の展覧会の見取り図案ですが、この空間に入ると、興味を持っていない子どもがしばらくすると自分で発見することを学んでいけるようにしています。物を作るのが好きな子どものためには専用のテーブルを用意してありますし、パフォーマンスをしてそれをビデオに撮って自分で楽しむのが好きだという子どものためにはそういった舞台も用意してあります。下にあるのはアーケードゲームのコーナーですが、これは子どもたちが体験できるインタラクティブな教育的装置です。

企画の数は増えており、例えばAPT7では13あるプロジェクトのうち九つがチルドレンズ・アート・センター、それ以外はレストランやギャラリー空間全域で展開しています。一つも楽しめないという子どもが出てくることはないでしょう。

プログラムと協賛の関係性

計画途中のプランを少しお見せしましょう。これは次のチルドレンズ・アート・センターの企画で、これを実現するためにはおそらく15万豪ドル(約1,470万円/1豪ドル=98円*)ほど必要になるため、私たちは地元に着目し、スポンサーを獲得することを重視しています。通常スタッフとプロジェクトに関わる出版物関係、そして学校などに送る教育目的のキットなどの費用は美術館で持つことが多いですが、全体的に実現していくためには資金が必要です。例えばオーストラリアの大手鉱山会社であるサントスや、ティム・フェアファックス・ファミリー財団といった有力な慈善団体にご協力をいただいています。

スポンサーとの関係は非常に重要なものです。例えばサントスはクイーンズランドの中心から離れた場所が拠点です。私どもは(クイーンズランドの州都である)ブリスベン市ではなく、クイーンズランド州のアートギャラリーなので、州内の遠隔地でも自分たちの活動を提供しています。一方、ティム・フェアファックス・ファミリー財団も、州全域で農業関係の事業活動を一族で行っており、個人としても地域への貢献に注力しています。地域でのプロジェクトや情報を都心に発信することにサポートして下さるだけでなく、地域への発信にも協力してくださっています。ご参考までに、APT7にティム・フェアファックス・ファミリー財団が実際に提供してくれた総寄付金は、30万豪ドル(約2,940万円/1豪ドル=98円*)になります。

帆足 | 補完しますと、クイーンズランド「州立」(でブリスベン市立ではない)ということは、いわゆる神奈川「県立」であって横浜「市立」ではないというようなことなのですが、州内でアウトリーチ・プログラムも展開されているということでした。

サイモン・ライト | はい。チルドレンズ・アート・センターは一般向けに開放しています。幼い子どもに向けた活動の一環として、週7日間開いています。子どもたちは、大人と一緒に来る子どもたち、学校の団体と、大きく二通りに分けて考えています。

学校の先生に対する調査をかなり行います。実際に学校の教室に行き、教師や生徒たちと密に接し、直接反応を探ります。私たちは、教育部門を通して自分たちの活動がクイーンズランド州のカリキュラムに合致しているということも必ず確認しつつ進めています。

※ 参照：三菱UFJリサーチ&コンサルティング WEBサイト・三菱東京UFJ銀行対顧客外国為替相場(2013年3月TTM月中平均相場)

教育普及と人材育成

加えて、チルドレンズ・アート・センターは子どもたちの担当をする係員として、教員免状の勉強もしている若手のアーティストを雇っています。ボランティアではありません。それは、私たちが大学教育の最新動向を逐一知ることができることに繋がるからです。また、若手のアーティストにとっても、子どもたちがさまざまな状況にどう対応し、アートとどう対話するかということを見ることができる良い機会となるのです。

帆足 | 今のお話ではかの質問にも枝分かれできそうなので、ついでに聞いてしまいたいのですが、アートセンターとエデュケーション部門がある中で、アーティストは有償で組織の中に入るといった話がありました。では、そのエデュケーター自身の研修、その人たちはどうしているのかということと、他に市民ボランティア的な人たちはどのように関わっているかということで、その常勤職員以外の方たちの関わり方と、一方で有償のエデュケーターたちのスキルアップまたは研修はどのようにされているのかを伺ってもよろしいでしょうか。

サイモン・ライト | QAGOMAには、チルドレンズ・アート・センターとは別のボランティア・プログラムがあります。

私たちは、チルドレンズ・アート・センターでは若いアーティストを雇わなければいけないという思いがあります。これには特殊な環境下で人材を育てる目的もあります。ボランティアに頼るには責任が大きすぎるのです。子どもたちはハサミや彫刻刀といった道具を使うなど、場合によっては危険を伴う状況で物を作っています。このため、まずキュレーターとエデュケーターが相談をした上で、常時登録されている25名のアーティストに対して、プロジェクトの中でということが求められているのかのブリーフィングを行うようにしています。

教育の現場との連携

しかし、スタッフはセンターの中だけにいるわけではありません。地域各所で活動するために、教育スタッフはインフォメーションシートなど展示内容に沿った資料や、ツアー用のキットを作成しています。今回のAPT7の場合は79か所にキッズAPTを巡回し、提供しています。

クイーンズランド州の地図を見ると、北にトレス海峡があり、非常に複雑な地形となっています。クイーンズランド州にはアボリジニがいるだけでなく、北側に位置するトレス海峡諸島に住んでいるコミュニティも同時に存在しており、オーストラリアの中でも複雑な立場にある州です。どういう違いがあるかという、トレス海峡の島人たちはどちらかといえばメラネシアやインドネシアの方との親和性が高いという自己アイデンティティを持っています。一方、本土のアボリジニは、口伝や個々の歴史を大切にしています。私たちは、こういった文化的な差異をきちんと認識しつつ、コミュニケーションの手法を考えなければなりません。

こういった理由から、私たちの職場では、アボリジニ・アートのキュレーターとアジア太平洋地域専門のアートのキュレーターがいます。また、チルドレンズ・アート・センターの担当者、教育部門、そして私とが共に会議を行い、一つのプロジェクトに取り組んでいます。

スタッフは全員研修を受け、ボランティアも受けます。研修では、特に各プロジェクトの具体的な情報についてきちんと伝えるようにしています。ボランティアの場合は、さらに応急処置を含めた、緊急時の対応についても研修を受けてもらっています。チルドレンズ・アート・センターで働くスタッフに関しては、やや難しく、子どもたちと一緒に何かの活動をして問題を起こさないという確認が警察からも入るため、専用の研修が求められます。研修は、継続的かつ定期的実施しています。加えて、教育担当の2名の職員と、チルドレンズ・アート・センターの2名の職員は定期的に、美術教師の集まりや、そのほかの専門家の団体等とのミーティングを開き、カリキュラムの最新状況について情報を刷新するようにしています。

美術館では、スタッフの個々人の専門性を高めるためには、ボランティアであれ、チルドレンズ・アート・センターで臨時で雇っている若手のアーティストであれ、重点的に投資します。

ゴードン・フーキー(1961年オーストラリア生まれ)は、オーストラリアのアボリジニのアーティストなのですが、非常に政治性が強いと言われています。彼の作品は、植民地化や、アボリジニの人々が自分たちの本来持っていた土地から移り住むことを余儀なくされたこと等について語りかけています[FIG. 16]。

アボリジニの歴史は、クイーンズランド州の教育カリキュラムのなかにも組み込まれており、学校側もこの件に関して新しい教え方を模索しています。アボリジニの文化は視覚的にも口述的にも伝えられています。

教える上では、アボリジニといっても単一の民族ではないという点を強調しようとしています。オーストラリアには700の言語があり、それぞれが個別の文化を持っています。ゴードン・フーキーのトーテムとはカンガルーなので、今回のアート・センターでのプロジェクトでは4種類のカンガルーを取り上げようかと考えています。^{*}

^{*} フーキーによる児童書『The Sacred Hill』を元にしたKangaroo Crewというインタラクティブなプロジェクトを実施。



FIG. 16 Gordon Hookey, *Blood on the wattle, blood on the palm*, 2009

どうやって人が入植していったのかということ、このカンガルーのメタファーを使って伝えます。最初にアボリジニが来て定住し、あとから白人が来たのですが、ここでは騒がしい九官鳥が飛んできて、聖なる丘の上で暮らしていた4種類のカンガルーたちを追ひ払います^{FIG. 17}。

1番左にいる小さいカンガルーが「ツリーザ」です。木のカンガルーで、木の枝葉部分で暮らしています。2匹目は「ロッコ」という名のロックワラビーです。このため作業用機の椅子は全て岩(ロック)になっています。「ポツツイー」と「ブルーイー」という岩場や平地に住む別のカンガルーもチルドレンズ・アート・センターで紹介していきます。

クイーンズランド州の教育方針に沿って、この話は4種のカンガルーたちが力を合わせ、一度手放した聖なる丘を取り戻し、最終的に九官鳥と共に暮らしたという和解の物語になっています。子どもたちは、それぞれの動物たちの特徴を読み解き、説明していくことも求められます。力持ちである、頭がいい、目がよく見える、跳ぶことができる、といった点です。これらの特徴を自分たちでも実際のプロジェクトの中で体験できるようになっています。

このプロジェクトは二つのアボリジニの学校で綿密な調査をして、アボリジニの生徒さんと先生方のフィードバックをいただいた上で、文化的にみて問題がないことを確認しています。

帆足 | ありがとうございます。

ところで、7日間無料でキッズ・アート・センターが開いているというお話がありましたけれども、QAGOMAは入場無料ですよ。

次に非常に多くの質問をいただいたのが、やはり評価のことでした。特に子どものプログラムの評価について今のような実施されているのか、またどのように課題を抱えているのかということ伺いたいと思います。

事業の評価測定とその還元

サイモン・ライト | 当館では独自の評価が必要だと考えています。数字で出せる部分は内部で行っていますが、体験のクオリティという難しい部分の評価についてはモリス・ハーグリーブス・マッキンタイア(<http://www.lateralthinkers.com/>)というロンドンにある会社に委託しています。この会社とは数年間かけて、子どもと親と教師向けに非常に細かな項目を入れたアンケートを設計しました。そして全てのプロジェクトできちんとした代表サンプルが採れるようにしています。

毎日50件から100件の評価を実施しています。これにより大きなフィードバックを得て、還元することができます。必要とあらば展示会の会期中であってもコミュニケーション戦略を微調整して、それに応えていくことができるわけです。

帆足 | 定性的な評価については、イギリスの会社に委託しているということですが、この会社を選んだ理由、もしくはその会社の評判、評価というのはどのようなものなのでしょう。

サイモン・ライト | その会社を宣伝するつもりではないですが、モリス・ハーグリーブス・マッキンタイアは業界全体の中でも評判が非常に高いところです。偏見のない質問項目を作る方法論的な枠組みを持っているということで評価しています。評価項目を使い回さず、きちんと個別の美術館に合わせてテラーメイドで作るといふ点です。もう一つこの会社の良いところは、単に私たちの美術館の活動だけに焦点を当てるのではなく、美術館の運営にかかわる条件や事情も考慮してくれるのです。クイーンズランド州政府の掲げる文化観光や、教育目標、地域コミュニティの発展、観客層の育成等の目的に対しても理解した上で、それらに対応した評価を行ってくれます。

自分たちの自己評価も常に行っていますが、スポンサーがどういふことを求めているのかということ常念頭に置いています。石油・天然ガス会社のサントスの場合は、提供した資金の用途は問いませんが、彼らは州の各地で事業を展開しているので、私たちもそのエリアで実績を見せる必要があります。サポートしてくれている団体の方々にも関わっていただきたいので、彼らの子どもにも特別プログラムを提供しています。同時にフィードバックをもらえるようにしています。それ以外にも、展示や企画について実際の観客の期待と差がないかなど、学校と連携して意見を拾っています。

最後に、プロジェクトによってはツーリズム・アンド・イベント・クイーンズランドやブリスベン・マーケティングといった特定の団体がスポンサーになる場合もあるのですが、こういった団体からは詳細な情報を要求されます。このため、彼らの期待値に合わせるべく常に詳細な評価を実施することになります。例えば観客動員数が未達であったということから、スポンサーシップとして提供されるといっていたお金が満額ではなくなることもあり得ます。こういった団体は、美術館に人が来た場合、ブリスベンのどこのホテルで何泊するのか、どれくらいのお金を落とすのかとい

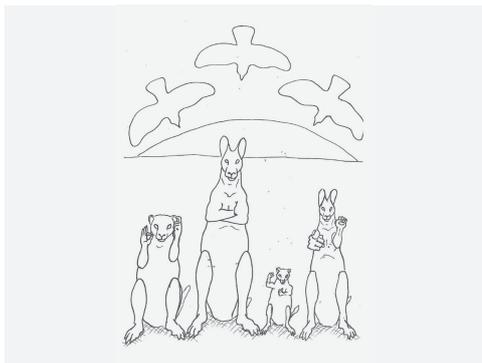


FIG. 17 Gordon Hookey コンセプト・スケッチ

うことを知りたがります。

帆足 | ということは、一般の企業のほかに地元の観光局系がスポンサーになっているということも評価の対象の幅を広げているという話ですね。

最後の質問となりますが、評価のほかに展覧会こそがその来場者増を「ドライブ(推進)」していく、そして、その展覧会を作るのはアーティストであるという話をされていたかと思います。

QAGOMAでは、アーティストは展示する人、アートセンターで雇われている人など、さまざまなかたちで関わっているようですね。キッズAPTのなかでの作品を展示または委嘱する場合、どのような基準で作家を選んでいるのですか？ またどのような方法で依頼していますか？ 最後に、アーティストとの付き合い方について、教育プログラムとして特徴があれば教えてください。

サイモン・ライト | コラボレーションという言葉が一番しっくりくるでしょう。その過程のなかで、美術館もアーティストもひとりでやっていると感じることはないと思います。とても密に連携し、コミュニケーションを図っています。チルドレンズ・アート・センター独自のプロジェクトだけを行っているわけではなく、QAGOMAの二つの美術館でもプロジェクトを進めています。クイーンズランド州立美術館とGOMAでプロジェクトをやっても、チルドレンズ・アート・センターではそのアーティストの企画をやらないということもあります。色々な方面からチルドレンズ・アート・センターへの活動の幅は広げられるように模索はしています。しかし、アーティストの考え方を考えることはしたくないので、なにかをやしてほしいと指図することはありません。もしもアーティストがしっくりこないといった状況があるとすれば、アーティストは他にも機会はたくさんあるので正直にその旨を伝えてくれるでしょう。

一つ分かってきたことは、子どもたちというのは幼くても非常に複雑な考えをきちんと受け止めることができるということです。アーティストにも質を下げてもほしくありません。子どもたちに紹介する方法を工夫することで作品にあるさまざまな断面を子どもたちが自分で理解し、身に付けていくことができるようにすればよいのです。

従来から存在していたものをただ自然に発展させていった、そういったものこそが一番良いプロジェクトに繋がってくるのが分かってきました。

帆足 | どうもありがとうございます。実はほかに細かく色々な質問をいただいているので、今日は全部質問できないのが大変残念なのですが、本日はここで終了したいと思います。

APT7は2013年4月14日までオーストラリアのブリスベンで行われています。皆さんこれを機会にぜひ行ってみてください。クイーンズランド州は、ゴールドコーストで有名ですが、実はこのようにブリスベンに美術館があって、アジアと大洋州の美術を中心とした作品を収蔵し、3年に一度特徴のある国際展を開催しています。

最後にサイモンさんに拍手をお送りください。

サイモン・ライト

クイーンズランド州立美術館／ギャラリー・オブ・モダン・アート
プログラム担当アシスタント・ディレクター

1993年よりキュレーターおよびマネージメント職として商業画廊、私立美術館および公立美術館の仕事に携わる。グリフィス・アートワークス+グリフィス大学アートギャラリーのディレクター、プライベートコレクションのコンサルタントを経て、2007年よりクイーンズランド・アート・ギャラリー財団に所属、2012年11月より現職。これまでに200以上の展覧会や出版プロジェクトを担当。

クイーンズランド州美術館・博物館アチーブメント賞(2004年-2005年)、オーストラリアビジネス芸術文化振興財団のクイーンズランド州ナショナル・オーストラリア銀行提携賞(2006年)を受賞。第53回ヴェネツィア・ビエンナーレ(2009年)オーストラリア館コミッショナー評議委員、第54回(2011年)同ビエンナーレのオーストラリアチャンピオンプログラムメンバー、クイーンズランド州国際彫刻委員会のプレミア選考委員会委員(2012年)、QCA 産業諮問委員会委員(2012年)など歴任。

©写真クレジット

FIGS. 1-14 (6-10頁)、FIGS. 16-17 (13-14頁) : Queensland Art Gallery / Gallery of Modern Art [QAGOMA] 提供
FIG. 15 (11頁) : 横浜美術館 提供

来場者アンケート

[来場者数] 67

[アンケート回答数] 54

[男女比] 男：6 | 女：44 | 未回答：4

[年齢] 19歳以下：1 | 20代：11 | 30代：15 | 40代：12 | 50代：10 | 60代：2 | 未回答：3

[住まい] 横浜市内：20 | 横浜市外(県内)：9 | 東京都：18 | 国内：3

本プログラムの内容について

- ・ 現代アートと子どもをどのようにつなげればよいのか、きっかけ作りに役に立った。
- ・ APTの存在を初めて知った。子どもたちから広がるアートという視点になるほどと思った。小学校教員として今後の教育活動に生かし、もっともっとアートと子どもをつなげていきたいと思った。
- ・ 学校と美術館、アーティストと美術館の関わりやその重要性、実際の具体的な活動などを知ることができ、大変勉強になった。子どものためのプログラムは、子どものためのものだけではないと実感した。
- ・ APTがオーストリアの歴史・民族(アボリジニなど)とアートが“結び”ついていた点が興味深かった。
- ・ 組織体制についてスキのない取り組みで着実に来場者数を伸ばしていることに感心した。ボランティアに対しての考え方も日本とは違う正論があると思った。
- ・ 本日のように取り組みについての思考検討プロセスを公開のかたちで提示されるのはとても良い。
- ・ 海外の成功例のそこに至るまでのプロセスが解ったことは良かったし、日本においてもイベントが広く知られ、アートの裾野が広まればよいと思う。

横浜トリエンナーレ全般に対する期待

- ・ 子ども参加のブースを設けてほしい。
- ・ 本日のシンポジウムのテーマでもある、子どもと現代アートをつなぐプログラムが盛んになってくることを期待している。
- ・ ガイドブックの小中学生版が欲しい。ちょっとしたお話仕立てのような難解な語句のないものがあると良い。ヨコハマトリエンナーレ2014では、ちょっと遠い新港ピア会場にぜひ行ってみたいと思える(作品以外の)仕掛けがほしい。
- ・ 今日のはなしを活かしてほしい。トリエンナーレは毎回子どもを連れている。このよさを活かせる環境を作してほしい。
- ・ 参加でき、手で、体で味わえる。
- ・ アーティストとともに手を動かすワークショップ。
- ・ 多世代で楽しめる内容にしてほしい。見るだけでなく、ワークショップなど、体験型の作品も多いとアートとつながった印象を持てると思う。
- ・ もっと地元をまきこんでほしい。
- ・ 世界に誇れるものになってほしい。
- ・ 準備段階の事象を公開すれば、新たなアートイベントや類似のイベントの促進につながると思う。この取り組みを「横浜」のみに留めないで先駆者となってほしい。
- ・ 初めて美術館を訪れた人にとっても、何度も訪れている人にとっても、開かれた場(参加しやすい場)であってほしい。
- ・ 物事の問題を感じて、考えることの大切さを伝えることは大変難しい問題だと思うが、その入り口であってほしい。ヨコハマトリエンナーレ2014では、森村さんの考えられている「エンターテインメント」に期待します。日本に現代美術を浸透させてほしい。

Yokohama Triennale 2014 Pre-event
A Case Study on
Educational Programs of
Asia Pacific Triennial of Contemporary Art
in Australia

Kids' APT:
Connecting Contemporary Art
and Kids
Document

ヨコハマトリエンナーレ2014 プレイベント
オーストラリア発、国際展における次世代教育普及プログラムの事例紹介
「現代アートと子どもをつなぐキッズAPT」
記録集

発行日：2015年6月30日

編集・発行：横浜トリエンナーレ組織委員会

〒220-0012 横浜市西区みなとみらい3-4-1 横浜美術館内

翻訳：田中 彩(英文和訳)、帆足亜紀(和文英訳)

写真(3-4頁、19頁)：加藤 健

デザイン：津山 勇

Date of publication: June 30, 2015

Edited and Published by: Organizing Committee for Yokohama Triennale

c/o Yokohama Museum of Art, 3-4-1, Minatomirai, Nishi-ku, Yokohama

220-0012 JAPAN

Translation: TANAKA Aya (English to Japanese),

HOASHI Aki (Japanese to English)

Photo (PP.3-4, P.19): KATO Ken

Design: TSUYAMA Isamu